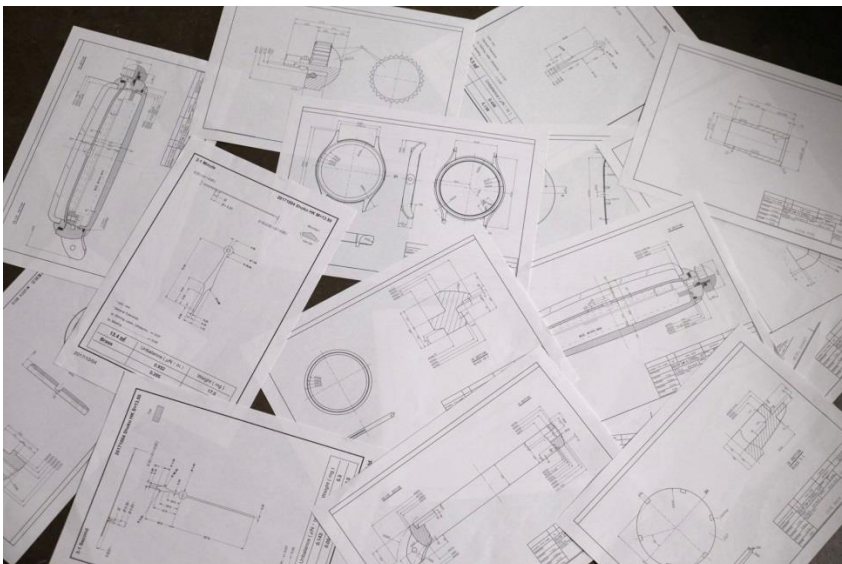


【CHRONO TOKYO】 補足資料(制作プロセスとディテール)



▲初期のデザイン画。その後、何度もリファインが繰り返された。



▲デザインに基づいた図面。

ムーブメント以外の全ての部品が、この時計のために新たにデザインされ作られた。

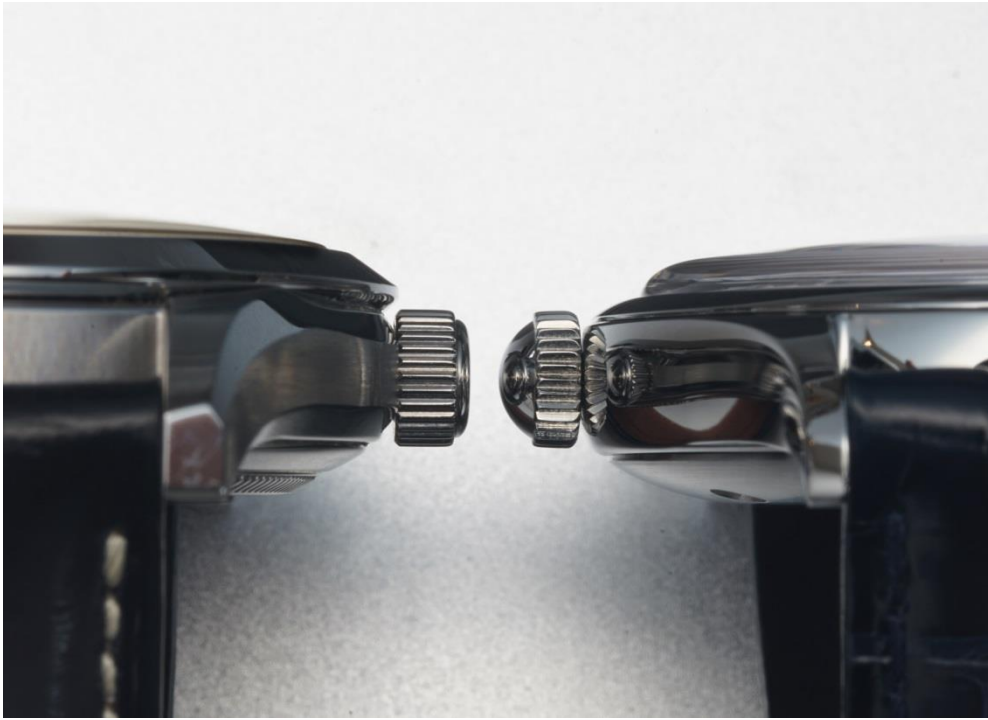


▲初期試作機。ダイヤルカラーは3色検討され、ホワイトとグレーが採用になった。

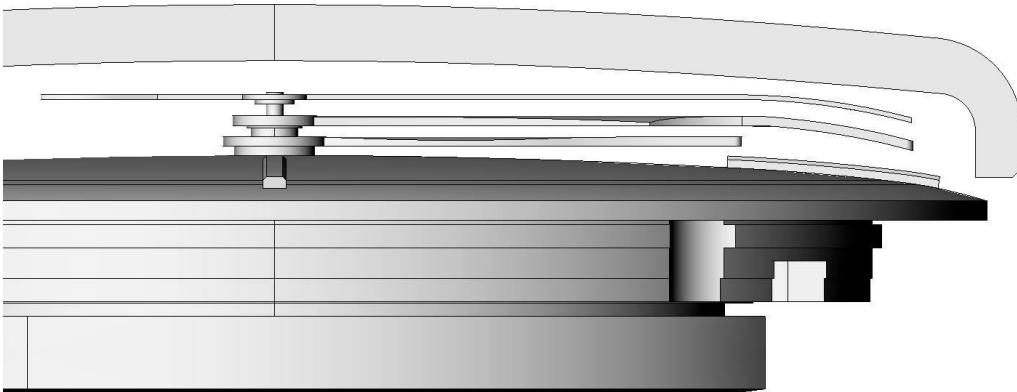


▲初期試作機のダイヤル。

膨らみのある、いわゆるボンベダイヤル。12時のインデックスは2本植えに見えるが、取り付け精度を上げるために、スリット入りの幅広のものが用意された。



▲本機では、アクリル風防同様のフォルムを持つボックスサファイアを採用している。画像はボックスサファイア（右）と従来のデュアルカーブサファイア（左）の比較。ボックスサファイアではその内部空間に針を納められるので、ベゼルの位置を下げるができる。これはアクリル風防が主流だった 1960 年代ぐらいまで行われていた「仕立て」。



▲文字盤、針、ガラスの位置関係を示す図面。
ギリギリのクリアランスに収めている。



▲試作の文字盤（左）と製品版（右）。
ロゴやレイルウェイの幅などが微調整された。



▲試作の文字盤（左）と製品版（右）。
製品版では、レイルウェイの幅をわずかに 0.1mm 細くしている。



▲試作機の装用テスト。普段使いの時計ゆえ、とりわけ装着感は入念に追及された。



▲化粧箱のデザインサンプルを製作している。
1960年代以前の時計のパッケージをイメージしている。
コストをかけず、見栄えの良い箱がコンセプト。この試作も浅岡肇自らが手がけた。



▲完成した試作の化粧箱。



▲製品版の化粧箱。試作に極めて忠実に出来ている



▲化粧箱外観



▲新規に作られた尾錠。

尾錠は当初は既製品の予定だったが、この時計のデザインに合う小さな尾錠は最近は無く、それで金型から製作された。



▲鏡面仕上げの密度がわかる画像。

定評ある HAJIME ASAOKA に準じる仕上げ。